

井上和子先生との思い出

著者	上田 由紀子
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
号	24
ページ	17-19
発行年	2018-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001497/

井上和子先生との思い出

上田 由紀子
(山口大学)

井上和子先生は、国際基督教大学、津田塾大学を経て、古稀を目前にした1988年、神田外語大学にご着任下さった。私が学部の2年生のときであった。これより、私は先生が天に召されるその時まで、29年に渡り、ご指導いただくこととなる。

着任後、井上先生は自ら、授業を通して、読書会を通して、神田外語大学・大学院に、「言語学」という学問の種をまき、私たちを忍耐強く育てて下さった。一期生の私たちには、先輩となる院生はおろか、学部の上級生もまだいなかったため、その役目の全てを井上先生ご自身が担って下さった。毎週火曜日の5時から大学が閉まるまでの数時間が先生との読書会の時間であった。先生は、お紅茶とチョコレートを必ず用意して下さっていた。帰りは、一緒に幕張の駅まで歩いて帰った。当時、先生はすでに70代であったと思うが、駅に向かう途中にある国道を、「渡ってしましましょう！」とおっしゃって、いっきに走って渡っていたことを思い出す。授業のない、休みの期間は、時間をたっぷりとって下さった。Noam Chomsky氏の一連の論文や著書もこの読書会で先生と読んだ。先生との日々中で、いつしか私は、大学院へ行って、言語学を専攻したいと思うようになった。

井上先生は、「言語学」の礎を築いて下さったばかりでなく、「夢」を「現実」へと変えていく過程を私たちに示して下さった。大学院の設立、COEの採択、夢は、私たちの目の前で、現実となった。この期間に得た、学びと経験と出会いの1つ1つが、現在の私の糧となっていることを強く感じる。

井上先生が私たちに与えて下さったかけがえのないことの1つに、故山田洋先生との出会いがある。山田先生は、ICU時代の井上先生の教え子で、本大学院開学の際、赴任して下さったのだ。山田先生は、私たちの知らない、ICU時代の井上先生のことをよくお話して下さった。学長になられて、お忙しくなった井上先生の代わりに、私たち院生は山田先生の元で、ご飯を食べながら、読書会をしながら、言語学の基礎を学んだ。そして、山田先生は、ご自身がICU

時代に井上先生にしてもらったことを、今、私たちにしているだけだとよく笑っておっしゃっていた。「たくさん、与えられた者は、人にもたくさん与えられるようになるから、もらえるときには、有り難くもらっておくといい。」と山田先生は私たちにおっしゃった。その言葉は、教育者として働くようになった今、私の心にさらに重く響いている。山田先生との日々は、わずか2年という短い間であったが、私たち院生にとっては、研究者として、教育者としての指針となる、かけがえのない時間であった。この2年間は、私たちにとって井上先生からの最大の贈り物であった。

井上先生は、召天されるその時まで、生涯現役を貫かれた。前述した「読書会」は、その後、通称「井上ゼミ」と名前を変え、2001年に先生が大学院をご退任なさった後も、2015年の夏まで続けられた。「井上ゼミ」の最大の特徴は、生成文法に携わる者だけでなく、国語学、日本語学、日本語教育など多岐にわたる分野の院生や修了生が自由に集い、発言できる空間であったことだ。井上先生はどの分野の発表にも、真摯に耳を傾け、するどい質問をなさった。そして、ご自身も私たちに混じって研究発表をなさった。私は、このような学際的な環境に違和感のない生活を神田で過ごしてきたが、学術的に分け隔てのない環境というのがいかに難しいことなのか、就職してから知ることとなる。分野を問わず、何でも尋ね、教えることが許される環境で、身近に国語学や方言学の先人の知に触れることができたことは、貴重な経験であった。

先生が大腿骨を骨折され、数ヶ月の入院を余儀なくされることもあったが、リハビリを経て、見事に復帰され、井上ゼミは、続けられた。骨折後、ご自宅の外では車椅子を使われるようになっていたので、ゼミの開催地を大学からもっと先生のご自宅の近くに移してはどうかとご相談したことがあったが、先生は、「大学」で開催することを強く望まれた。

先生との29年間、先生の後ろ向きな言動を、私は見たことがない。私たちが何かに囚われ、前に進めなくなっているとき、その囚われを一刀両断され、私たちは、その瞬間に、はっと我に返って、今、成すべき事を行う強さを得ることができた。前を向いてどんな一歩でも踏み出さなければならないと思わされた。井上先生が昇天されたとの知らせを受けた時、一つの時代に区切りがついたような、なんとも言えない寂しい気持ちを覚えた。ただ、その瞬間、井上先生ならば、「新しいことを始めればいいですわ!」とおっしゃるのだろうな

とも思った。先生からの教えを受ける幸運に恵まれた私たち一人一人がこの地上でなすべきことを誠実にやっていかなければいけないのだと感じた。

葬儀の際、井上先生の棺の中には、2017年4月1日付の神田外語大学学術顧問の辞令が共に納められていた。まさに、公私に渡り生涯現役を貫かれた証であった。

最後になるが、井上先生は、信仰に生きた方でもあった。食事のときは、共に祈った。そして、よく私にこう言われた。「私たちには、すべてをご存知の方がいらっしゃいますから、すべてを委ねて、こころ静かにその時を待ちましょう。」私は、こうやって、先生に叱咤激励され、今に至っている。

井上和子先生、ありがとうございました。